

長野部会

個人山行報告

金

月

1971

4/26 ~ 5/2

信州大学山岳会

伊那松本山岳部

はじめに

先頃、発行された伊那松本山岳部「山行報告
1971」に我々の早違いで、今山行が、もれており
ましたので、遅ればせながら、ここに、付録として
発行する次第です。

今年の5月に、高橋、川口両君が、この山行の
続々、核心部を剣本峰まで、やるそ�うなので、
それが成功すれば、ここに、2年がかりで、
残雪期5月の剣北稜線（宇奈月～剣）が
完成するわけです。

大安記

8.場所： 宇奈月尾根 より毛勝本峰

8.期日： 1971.4.26 ~ 5.2.

8.メンバー

大安徹雄

川口 隆

高橋雄治

村上純一

— 概要 —

計画としては、岳人260に載っていた大阪中央電報局山の会のほぼ同時期の記録の概要である。
当初は、宇奈月尾根より縦走を経て、金剛峠の尾根を下る予定であったが、雨で日数を食つてしまつて、毛勝本峰をサブでアタックし、東又倉より下山した。
岳人の記録によると、ブッシュが出たり、ザイルをかなく使用したりして、えらそうであったが、今回は、さ程でもなかった。時期的に遅いせいもあって、雪が、ズタズタで、部分的には、危い所もあったが、取り立てて言ふ程ではなく、平杭のコル真までは、何とか行けた。
しかし、毛勝本峰への登りは、迫力のあるものだった。
ここを、キスリングを背負って歩くのは、かなりきついことだと思ふ。やはり、北アルプス線の核心は、毛勝より、先であることを痛感した。今までのブッシュ混じりではなく、はっきりと岩と雪が、続いている。この山行でメンバーの2人もが、この先をやりたいと考え、意欲を新たにしてくれたのなら、それだけでも、喜ばしい限りである。高橋、川口、兩君の成功を祈る次第である。

— 行動記録 —

4/26 ○ AM11:00 松本発 魚津 ←

19:00 宇奈月 — 20:30 大原台スキー場

松本より、日本海、糸魚川へ出る。汽車を待つ間、糸魚川の海岸で、日光浴をする。天気よく、海鳥が飛びかい、潮の香が、気持ちよく、のんびります。

海を初めて見た川口君が、はしゃぐこと、はしゃぐこと。
夜になって、宇奈月の温泉街に着く。もろしく、カレーと
ラーメンを食い、マートスターの、かわやしげなネオンを
横目で、にらみながら、晴い夜道を宇奈月スキー場
(大原生)へ、とぼとぼ歩く。スキー場には、雪はない、
ひっそりと、ついで Hütte のコンクリートのベランダで、
星を見ながら、寝る。

4/27 ○ AM 6:00 スキー場発 — 10:30 1433m P
— 12:30 J.P. — 13:30 別又乗越

雪のない、スキー場を登って行き、林道沿いに進む。
記録では、618m P先のコルから取付いていたが、
林道を忠実に歩く。雪はない、林道は、宇奈月谷側
にあり、2 pitch 目で、道が終わり、1040m P先の沢を
アイゼンをつけて、尾根へ出る。ユージ君が、調子悪く、
ヒイヒイ言つている。やはり、怪物みたいな奴でもバテ
了ものかと感心する。ただ、広い尾根を、よろりながら
歩く。天気がよくて暑い。別又乗越には、まよまり、
雪がなく、花生の上に冬テント張る。後立の稜線
が、ぱっちり見える。

4/28 ○ AM 5:55 T.S. 登 — 6:10 僧ヶ岳 — 7:10
北駒 — 8:05 駒ヶ岳 — 9:10 滝倉山
— 11:05 1800m 台地 T.S.

今日も天気よく、又歩き始める。黒部側は30人と
崩壊した急斜面で東又谷側のブッシュ混りが
稜線上を歩く。記録によると、かなりザイルを出した。

しているが、我々は、彼等の行動に敬意を表して、彦ヶ岳
乗越への下降に、ギマン的にザイルを使ったのみだった。
されば、我々は、優秀なのだ。諸君！ 駒ヶ岳のピーグ
からは、剣の裏側が、壯嚴さをもって、そびえていた。
さすが、剣！ 全員何となく、バテ氣味で、よたよたしていた
ので、毛勝本峰の壮大なピラミッドを対岸に見る
台地（作え亟谷上部稜線上）にテントを張る。それに
しても、毛勝とは、大きな山である。

4/29 ① 凱旋し 沈

4/30 ガス ④ → ⑤ 沈

毛勝を対岸に見ながら、2日間、沈殿。雨になると
ナイロンの冬テントは衰れである。上にかぶせていた
ビニールも吹飛んでしまい、テント内は、水浸だし。
シェラフも水が出る位にびしょびしょ。さすがの
ゴールドフェザー部隊も、全滅。全7が、濡れてしまい
ラジオは、いかれるし、冬山の残りの石油とガソリンの
混合を間違って持つて来たのか、ガスも不調。沈殿
の暇つぶしに、数時間かけて、Essenを作る。体を
動かすと、冷たくてたまらぬ。つまり、同じ場所に
じっとしていて、体温で温めようしか、方法がないのだ。
ユージ君など、上下とも、雨具を着て、シェラフにも
ぐっている。まるで、水の中で、寝ているようだ。どうでも
よいから、早く、ここから、出たいよ。

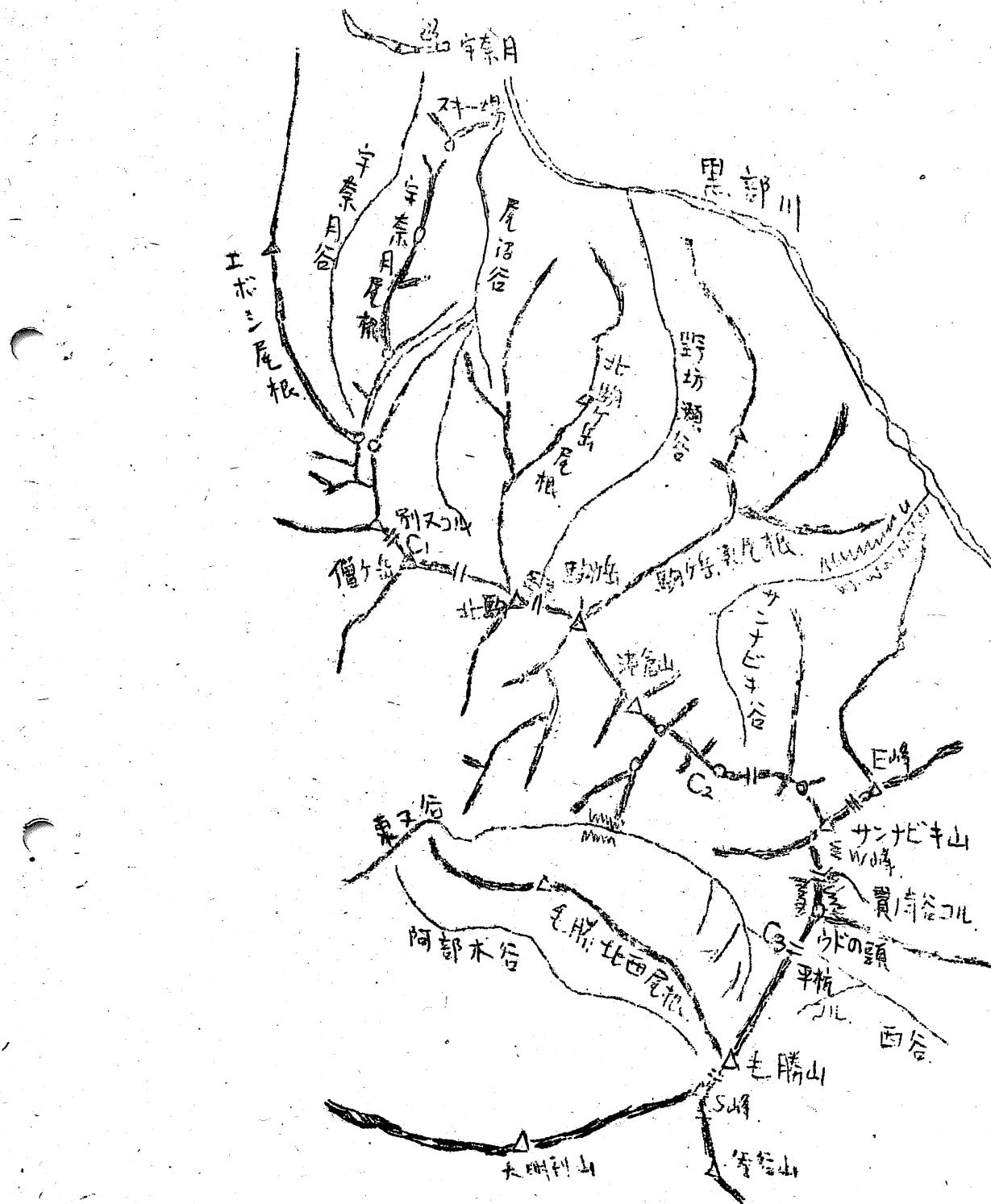
5/1 ① AM 7:30 T.S. 登 — 10:15 サンナビキ W峰
— 12:30 貴ノ寺谷コル — 14:30 平筋乗越

起きた時は、ガスっていたが、AM 6:00頃より、ガスが晴れ出たので出發。装備の全てが濡れて重い。サンナビキ W峰より先は雪がズラズラで、くずれ音で歩きにくい。賀ノ奇谷コルまでは、ひどいブッシュくぐりで、ブッシュの大嫌い。村上君がヒスを起さない限り。賀ノ奇谷コルへの下障は、ギヤン的なアップザイレンであった。ウドの頭は、東又谷側の斜面をトラバース、平杭乗り越まで一気に下る。毛勝本峰への「天国への坂道」が、うねらしい角度で進づる。

5/2 ① or ② AM 6:10 T.S. 発 — 7:40 毛勝本峰 — 9:00 T.S. 着
— 9:30 撤収、発 — 11:00 東又谷取入口 — 14:30 東蔵 B.S.

サグで、毛勝 Attack。さすが、「天国への坂道」と呼ばれるだけあって、ものすごい斜面である。アイゼンをフラットに置くのが、苦しく、足首が痛くなる。毛勝の頂上は、広く展望は最高である。剣への核心部が、岩と雪のミックスが、遠々と続いている。振り返ると、日本海が、かすんで見える。下りの怖つかないこと。天国ではなく、地獄へまたがさまである。途中で、アイゼンを落し、色々、グリセードに入る。快適である。見子車は、ピーコクが、遙の土 T.S. まで直送である。こんな快適で長いグリセードは、小生の短い山歴の中でも初めてであった。また、テントをたたみ、東又谷に入る。東又谷は、槍冰に必殺刃の大奇谷である。どんどん飛ばす。三階櫓の遠は、かなり、しまつぽい右岸を高巻く。取入口から、Bus Stop の東蔵までの長く辛かったこと。村上の野郎が、ツンとふくめて、とばすは、とばすは、無口にふくされてもんとも歩いて行く。後から、3人、仕方なしに、ついでいく。朝、毛勝から東剣のすばらしさに感嘆したのに、前方には、そのままの姿をもうしく追いかけていく。いつものことながら、不思議な現象である。

— 毛勝山周辺概念図 —



仙人山行報告「毛勝」

1972. 2. 19 発行

がり切、印刷、大安

50部 限定出版

値段つけ難し。